市民・学生・自治体部門



桃山学院大学 森田ゼミ（卒）
石橋諒大

自閉症とわたし

◎プロデューサー／森田 良成
◎ディレクター／石橋 諒大

［16分］

●制作意図

「普通でありたい」と願うことは、誰のため、何のためなのでしょうか。
自閉症当事者である私は、周囲との違いに悩みながら生きてきました。一方、
母もまた、思い描いていた子育てとの違いに戸惑い続けてきました。しかし母は
その過程で、「普通」や「常識」に縛られていたのは子どもではなく、自分自身だった
ことに気付いたと言います。本作は、母と私の対話を通して、「障がい」とは何かを
見つめ直す試みです。違いをなくすことではなく、自分や他人に備わった違いを
許容し、理解し合うこと。その先に見える景色を、観る人と共に考えたいと思います。

●あらすじ

自閉症のあるわたしは、人間関係に苦しみながら成長してきた。しかし高校生の
頃から少しずつ自分なりの生き方を見つけていった。大学生活では想像していた
以上に充実した日々を送るようになった。その歩みのそばには、いつも母がいた。
喜びや戸惑いを抱えながら、誰よりも近くでわたしを見守り続けてきた母である。
本作は、自閉症当事者であるわたしと母との対話を通して、それぞれが歩んできた
道のりをたどるセルフドキュメンタリーだ。「普通」とは何か。「障がい」とは何か。
母と子、それぞれの視点から問いかける。

市民・学生・自治体部門



関西学院大学 津田睦美ゼミ(卒)
正田綾・村﨑凛

若者が出ていく美しい里で

◎プロデューサー／村﨑 凛、正田 綾
◎ディレクター／村﨑 凛、正田 綾

［32分］

●制作意図

人口減少と高齢化が進む熊本県美里町を舞台に「離れて生きる」故郷のあり方を追った。制作者自身が進学で町を離れた当事者であり、「外に出たからこそ見えた故郷の価値」を起点にしている。本作は、町出身の若者たちが空き家を活用したイベントを企画し、住民と共に故郷の記憶を見つめ直す過程を記録した。町の美しい風景や温かなつながりを映し出す。その一方で、過疎地域の若者流出を単に否定するのではなく「故郷が好きだけど外へ出る」といった若者たちの率直な声を通し、新たな「故郷のあり方」の一つを表現している。「帰りたいと思える場所」であり続けることが、地域の未来につながるのではないかという問いを投げかける。

●あらすじ

若者の流出が続く熊本県美里町。地元出身の若者たちが、住民と共に故郷の記憶を見つめ直すイベント「MADOI」を企画し、空き文房具店を再生させていく。しかし、開催直前に豪雨災害が町を襲い、美しい風景や平穏な日常が突如として奪われてしまう。本作は、この予測不能な現実に直面した若者と住民の姿を追ったドキュメンタリーだ。「故郷が好きだけど外へ出る」という若者たちの葛藤、そして災害を経て浮き彫りになった「永遠ではない故郷の姿」を記録。「失われゆく故郷とどう繋がるのか」「帰りたい故郷とは何か」、変化する美里町の姿を通して、視聴者へ「ふるさとのあり方」を強く問いかける。

市民・学生・自治体部門



FRUSIC（フルージック）

ヤギとの時間
Time with Goats

◎プロデューサー／渡邉 祥二
◎ディレクター／渡邉 祥二

［46分］

●制作意図

本作は、ヤギと人が共に暮らしながら地域課題の解決に取り組む姿を、人々の視点から記録したドキュメンタリー映像です。効率や便利さが優先される現代社会において、失われつつある地域とのつながりや自然との共生の価値を見つめ直し、これからの地域社会のあり方を考えるきっかけを提供します。
教育教材としても活用できるよう制作しており、高校・大学での授業や探究学習をはじめ、地域づくりや環境、防災を考える場での活用を想定しています。ヤギが地域にいることで何が生まれるのか。緑地管理にとどまらず、教育や防災などにつながっています。この取組みは日本だけでなく、世界各地の地域社会にも共通するテーマだと思います。

●あらすじ

開発によって生まれた緑地帯の維持管理や地域の慢性的な人手不足という課題に対し、人とヤギが「ヤギさん除草隊」を組織し、地域の緑地管理に取り組みます。
本作は、その活動が単なる除草にとどまらず、さまざまな地域活動へと広がっていく姿を記録しています。緑地管理を研究する大学生が小学校で環境学習を行い、病院ではヤギが草を食む風景が患者や地域の人々の癒しとなります。また、ヤギの堆肥を活用した農作物の栽培やその農産物を生かした高校生による防災食の開発など、新たな学びや地域連携も生まれています。さらに、ヤギを中心としたイベントを通じて、多様な世代や立場の人々がつながっていく過程を映像に収めています。

市民・学生・自治体部門



大阪芸術大学 放送学科
澤田ゼミ 入野日向

ばあちゃんの手

◎プロデューサー／入野 日向
◎ディレクター／入野 日向

［18分］

●制作意図

映像そのものから人物像が立ち上がる表現に挑戦したいと考え、
本作を制作しました。取材対象に選んだ祖母は、過去の出来事を抱えながらも
自分らしく生き続ける魅力的な人物です。身近な存在だからこそ見過ごしていた
一面を見つめ直し、その生き方や存在感を映像で表現することを目指しました。

●あらすじ

宮崎から大阪へ渡り、現在は一人で暮らしている祖母の日常を記録した
ドキュメンタリーです。刺し子に取り組む時間や家での何気ない様子、趣味や生活の
一面を通して、その人となりを描いています。カメラは祖母の「手」に焦点を
当てながら、日々の営みの中に刻まれた時間や人生の軌跡を静かに映し出しました。

市民・学生・自治体部門



日本工学院専門学校 放送芸術科

おかえりバカヤロー
～90歳のスナックママ～

◎プロデューサー／伊藤 梨香
◎ディレクター／大道 叶花

［23分］

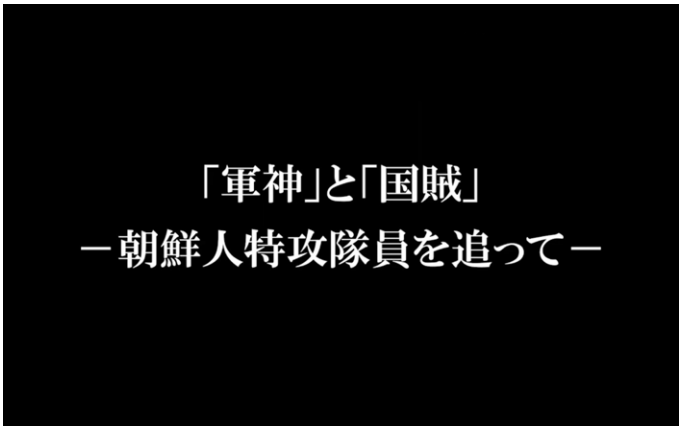
●制作意図

学校の近くにある蒲田一の老舗スナック、バッカス。このお店で90歳を迎えた今もなおカウンターに立ち続ける、ママの人柄と魅力に迫る。
2025年は戦後80年という節目の年。卒業制作作品のひとつとして、戦争経験者であるママの生き様を記録することで戦争の悲惨さと平和の尊さを伝える。

●あらすじ

蒲田一の老舗スナック、バッカス。カウンターに立つママは、御年90歳の西原みどりさん。お客さんと楽しそうに笑い、時折辛辣なワードを放つ彼女の姿を見て、まさか90歳だと思う人など、いないだろう。しかし、彼女は戦争の時代を生きた1人。現代を生きる私たちからは想像もつかない、辛い経験を山ほどしてきた。また、彼女は在日韓国人であることから、様々な差別にも遭ってきたという。今回の番組では、彼女の生い立ちから戦争での経験、更に在日としての生き方と現在の姿をドキュメンタリー形式で映し出す。壮絶な過去を抱えながらも、今もなおタフに明るく生き続ける彼女の生き方から強く生きることの素晴らしさを伝えたい。

市民・学生・自治体部門



中央大学 国際情報学部（卒）
田畑美徳

「軍神」と「国賊」 ー朝鮮人特攻隊員を追ってー

◎プロデューサー／松野 良一
◎ディレクター／田畑 美徳

［30分］

●制作意図

太平洋戦争末期に行われた特攻作戦。当時日本の統治下にあった朝鮮半島の若者17人が特攻作戦で戦死している事実は、あまり知られていません。日本軍は、朝鮮半島出身の特攻隊員を「半島の神鷲」「軍神」として宣伝に利用しました。
日本敗戦後、韓国では特攻戦死した彼らを、日本に協力した親日派であり「国賊」であると批判しました。一方で、生き残った朝鮮人特攻隊員は、韓国空軍の創設や大韓航空の会社設立に参加し、「英雄」扱いとなりました。戦前は「軍神」と呼ばれ、戦後は「国賊」と批判され続ける戦死した朝鮮人特攻隊員。日韓の歴史認識の差によって、彼らは未だに彷徨い続けている現状を、ある慰霊碑建立騒動の視点から追いました。

●あらすじ

知覧特攻平和会館の敷地内には、朝鮮人特攻隊員を慰霊する碑が2つ建っています。しかし、韓国国内での慰霊碑建立は、除幕式当日に市民団体が押しかけて阻止されてしまいました。現在は、慰霊碑はソウル近郊のある寺の境内に移され、倒された形で保存されています。日本統治下の朝鮮半島においては、貧困や差別から抜け出すため、あるいはパイロットに憧れて日本軍を志願した若者もいました。しかし、韓国の世論は、そうした事情には冷やかです。
この慰霊碑建立騒動について、韓国人の研究者とジャーナリスト、さらにはお寺の関係者にインタビューし、その背景を明らかにしようと試みました。

市民・学生・自治体部門



目白大学 西尾ゼミ(卒) 松田みなみ

熊谷空襲をどう伝えるか
−記憶継承のいま−

◎プロデューサー／松田 みなみ
◎ディレクター／まつだ みなみ

［31分］

●制作意図

本作品は、1945年8月14日に起きた熊谷空襲の記憶を、現在に生きる人々がどう受け継いでいくのかを描くドキュメンタリーである。取材では、空襲を体験した人々の証言だけでなく、その記憶を後世へ伝えようと活動する市民にも注目した。ディレクター自身も地域の人々と出会い、空襲の記憶に触れながら、継承の必要性を考えていく。出来事を外から説明するのではなく、取材者が記憶と向き合う過程を描くことで、戦争を単なる過去ではなく現在につながる問題として捉え、次の世代が自分ごととして受け止めるきっかけとなる作品を目指す。戦後80年、体験者が減少する中で、語り継ぐ意味と支える人々の思いを映像に残したい。

●あらすじ

戦争の記憶は、誰が受け継いでいくのか。1945年8月14日、熊谷市は空襲により市街地の大半を焼失した。本作は、その記憶を語る戦争体験者と、後世に伝えようと活動する市民を追いながら、戦争を知らない世代のディレクター自身が記憶と向き合う過程を描く。取材を通して見えてきたのは、証言だけでなく、市民団体の設立やとうろう流しなど、地域で記憶をつなごうとする人々の姿だった。
語り継ぐ場に立ち会う中で、遠い過去だった戦争の記憶が、現在と地続きのものとして感じられていく。戦後80年の今、本作は、記憶を自分ごととして受け継ぐとは何か、残された若い世代に何ができるのかを、映像を通してあらためて問いかける。

市民・学生・自治体部門



国際ファッション専門職大学
淺野ゼミ（卒）小林ひかる

黒いドレス
～東日本大震災から14年の母～

◎プロデューサー／小林 ひかる、淺野 麻由
◎ディレクター／小林 ひかる

［28分］

●制作意図

東日本大震災から14年。目に見える復興は進んだ一方、心の傷を抱え続ける人々は今も存在する。本作の主人公である監督の母は、震災を機に黒い服しか着られなくなった。娘である監督がファッションの力で母に色を取り戻そうと奮闘する姿を密着取材した。祖母を震災で亡くしたアーティストとの出会いでは、当事者同士の会話と共感によって母の心が揺れ動くさまを捉えた。祖母が遺した色とりどりの衣服が人生を物語る姿を前に、黒い服しか着られないことが遺された人をも悲しませるかもしれないという母自身の気づきが、本作最大の転換点となる。震災から14年、死者・行方不明者の家族に、震災後の生き方のひとつを提示したい。

●あらすじ

東日本大震災で被災した監督の母・小林しのぶ（52）は、震災後14年間、黒い服しか着られなくなった。娘である監督はファッションの力で母に色を取り戻してほしいと願い、誕生日を機に服やアクセサリー、メイクを提案するが頑なであった。しかし被災地を共に訪れ母の心の変化に迫る中、祖母を震災で亡くしたアーティストと出会い、当事者同士の会話と共感によって母の心が揺れ動いていく。祖母が遺した色とりどりの衣服が人生を物語る姿を前に、黒い服しか着られない自分もまた、遺される人を悲しませるかもしれないと気づく母。家族にしか撮れない密着取材を通して、見えない傷と向き合いながらも前を向こうとする震災の今を見出す。

市民・学生・自治体部門



大阪芸術大学 放送学科（卒）
佐藤凌平

単身密着　平阪佳久
自称世界一幸せな、売れないアーティスト

◎プロデューサー／佐藤 凌平
◎ディレクター／佐藤 凌平

［30分］

●制作意図

これまで大学で、MVやCMなどを作ってきたが、ドキュメンタリーを作っておらず、最後に制作しようと思った。
しかし、有名な放送局に属している訳ではないイチ大学生ができる取材には限界がある。だが、一人で取材に挑めば、対象者と深い関係を築くことができ、既存の番組では描けないような、対象者の「真の姿」を切りとる事ができるのではないか。弱みを強みに変えるべく、中古機材集め・修理から始まり、取材交渉から完成まで全て一人で行った。 当然、とても大変だった。
また、もし続編が作られても企画が破綻しない「連続した番組」としての番組名や構成を重視し、対象者選びは紹介や知人の伝手に依存せず、イチからアタックした。

●あらすじ

私が想像する”アーティスト”という人々は、「売れよう」「有名になろう」と闘っている(た)イメージがあった。「かっこいいCMソング集」という、誰かがまとめたネット動画で偶然知った67歳の平阪さんは、ずっと地元和歌山県に留まって活動している。和歌山に何か強い想いがあるに違いない…そう思い取材を申し込んだ。
しかし、取材を進めて聞こえてきたのは「うまくいくことだけがいい訳ではない」「大きくなることが全てではない」の言葉。
東京はおろか、隣接する大阪にすら拠点は移さず、活動は40年を超える。
何かに吸われるかのように地元を離れる一極集中の現代。視聴者へもう一つの「生き方」を共有し、提案できたらなと思う。

市民・学生・自治体部門



「私たちが向かうこの先は」
東海大学 樋口ゼミ 片桐・金

私たちが向かうこの先は ―あの日とこれからを問い直す―

◎プロデューサー／片桐 楓怜、金 栄洞
◎ディレクター／片桐 楓怜、金 栄洞

［32分］

●制作意図

戦後81年を迎え、憲法改正や防衛力強化を巡る議論が続く今日、本作品はそれを単なる賛否の二項対立では捉えない。
メディアを専攻する大学生の眼差しから、憲法9条が日本の平和を維持したと信じる国内の学生と、海軍兵役を経て安保の現実を見てきた韓国人留学生の「対話」を軸に据えた。
東京大空襲被災者の過酷な記憶に向き合うことで、過去の悲劇を歴史として風化させるのではなく、現代を生きる若者自身の切実な課題へと接続する。
凄惨な空襲の歴史を前に「私たちは何を優先し、何を選び取るのか」という、国家防衛と個人の命の尊厳の狭間で葛藤する若者たちのリアルなプロセスを提示するドキュメンタリーである。

●あらすじ

戦後81年の2026年。憲法9条の存在こそが平和を支えてきたと考える日本の学生と、安全保障の最前線であるイージス艦でミサイル訓練を経験した韓国人留学生。
メディアを学ぶ二人の大学生が、東京大空襲の被災者・吉田由美子さんの証言を起点に取材を重ねる。
実家跡地からわずか600メートルの場所に建つ現代のスカイツリーに対し、「切なくて今も上れない」と語る吉田さんの消えない傷。その過酷な記憶と、揺れ動く東アジアの現実に直面した時、二人の平和へのアプローチは激しく衝突する。
理想と現実の狭間で葛藤し、答えのない問いに沈黙しながらも、真の平和と防衛力の在り方を模索し続ける二人の姿を追った。

市民・学生・自治体部門



中央大学 松野良一ゼミ

梓特別攻撃隊
ー3000キロ特攻の新事実ー

◎プロデューサー／松野 良一
◎ディレクター／荻野 旭陽、宮﨑 翔大

［60分］

●制作意図

太平洋戦争末期、日本から3000キロを超えて特攻攻撃を仕掛けた部隊がいた。「梓特別攻撃隊」。その中に、中央大学の先輩・高橋正少尉がいる。防衛研究所に保存されている戦闘詳報には、彼は二式大艇に電探担当として乗り込み、ウルシー環礁に停泊する米海軍の艦船に突入し特攻戦死したと記録されている。この無謀ともいえる作戦はどのようなものだったのか、先輩はどのような運命を辿ったのか。

私たちは取材の過程で、元操縦士による証言の存在や、二式大艇の機体が今もメレヨン環礁に沈んでいるという情報をつかんだ。

本作は、梓特別攻撃隊の隊員らが辿った軌跡を追うドキュメンタリーである。

●あらすじ

「梓特別攻撃隊」。それは日本本土・鹿児島から飛んだ最初の特攻隊であり、3000キロという異例の飛行距離に挑んだ作戦であった。特攻を行う爆撃機「銀河」24機と、その誘導を担った「二式大艇」は、米空母の泊地となっていたウルシー環礁を目指した。旧日本海軍は、沖縄戦が始まる前に、同環礁に集結した米空母を特攻によって一網打尽にしようと考えたのである。

本作は、この作戦に参加した中央大学出身の高橋正少尉を起点に、元搭乗員の証言や遺族の声、そして日米双方の公的史料を交えながら、梓特別攻撃隊の全貌を描く。さらに、出撃後に消息を絶った二式大艇・誘導一番機と、銀河隊をヤップ島まで導いた誘導二番機の最期にも迫った。